
月山

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月山

【Nコード】

N4262I

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

目の前に現れた高校の時の彼。求愛されて心をときめかすが……。

ここまで来た。

漆黒の闇の中、もう生きていけない。

あなたが好きだから、もうこれ以上騙せない。あれは3カ月前。

「おい、今日は落の香さんの集金に行ってくれるか。俺は佐々木さんの方へ行くから。」

と、あなたは何も知らずに出かけて行った。私はもうそれを集金している。手元に340万ある。今から、二人でここを離れるの。やり直すの。この田舎ではもう生きたくない。

彼は幼馴染だった。ここまで迎えに来てくれた。私は高校の時に彼に恋をし、やがて彼の進学先が東京で離ればなれになった。泣いて別れたのにいつの間にか疎遠になった。そして私は21で見合い結婚。七年たっても、子供は授からなかった。主人は優しくなかった、姑は

「後継ぎがほしいねえ。」

と、私が台所にいるのに聞こえるように、息子に話している。

「そんなこと言わない。」

と、小さな叱責が聞こえるのが悲しい。結婚したら当たり前にできるものだと思っていたのに、友達は次々と妊娠していった。私はいつまでもできなかった。夫婦で病院に行こうと言われたけど、これできなかつたら最後通告みたいで嫌だと思い、私は行かなかった。二人の幸せだってあるはず。

そんなときに現れた彼。偶然、デパートの食品売り場にうちの漬物を納めていると、彼が地元デパートに赴任してきた。まだ独身の彼は颯爽としていて、スポーツマンの雰囲気は昔のままだった。私はエプロンをかけて、頭には三角巾。恥ずかしかった。

「久しぶりだねえ。元気そうじゃないか。」

「あなたは変わらないわねえ。私は完全に漬物屋のおばちゃんになったわ。」

「いやあ、若奥さんだね。相変わらずきれいだよ。」

そのお世辞に思わず有頂天になる自分がいた。そんなあと言いながら、つい饒舌になることが嫌われなかと心配だったが、話は弾んで昼食を一緒にとることを約束した。

家に帰ると、服を着替えて化粧を整えてレストランに行った。

それから、ときどきランチと一緒に食べたり、やがては飲みにも行った。同窓会と言って。

「ねえ、僕は本気だよ。離婚して僕について来てくれないか。」

「えっ、どこに行くの。」

「東京にまた戻るんだ。一人退社してしまつて人数が足りなくなつて。急だけど2週間後。」

「2週間。」

と迷う私に、熱いキスをしてきた。初めてだった。彼とは付き合つたとしても高校生の時は、遊びに行くぐらいでそんなことできなかった。二人とも初心だったのだ。でも、この日初めて結ばれた。

熱い抱擁と情熱的なセックスに身を焦がしていく。こんなことありえないと思うほど、溺れていく自分に驚いた。そして、こんな感覚をもたらした彼を愛していると、信じて疑わなかった。

だが、一言気になるのは

「会社の仲間と一緒に独立するんだ。それには少し資金が足りない。僕はあと300万用意しないと。」

私には自由になる金などなかった。精々独身の時にためた数十万。高校を出てから事務をして貯めたお金。しかも、寿退社したから自分の金と言えるのはこれだけ。でも、今月はまとまった集金がある。これだけあれば、会社が設立できるのだ。彼に喜んでもらえる。夢が広がっていく。

振込先に入れると、彼が

「ありがとう。恩に着るよ。先に東京で待つてるから。」

と言つて連絡が絶たれた。ケータイに電話してもつながらず、デパートは解雇されていた。ことの重大さに気づいたときは、すでに遅かった。私が夫を騙し、彼は私を騙していた。思わず笑いが込み上げてきた。そして泣きながら笑った。

ここにはもう住めない、と荷物をまとめたがどこに行くというあてもなかった。来たのは月山。以前この景色に圧倒されたことを思い出していた。夫が

「いいところだろう。この景色を君に見せたかった。この向こうが湯殿山だよ。」

広がる草原。木道を先に歩く夫の背中を見ながらついて行った。ときどき、振り返つて私が見ているかどうか見守っていてくれた。あの優しいまなざし、そして滑りそうな私を支えてくれたごつい手。もう触れることはないだろう。

下山していく人を見送るように座り込んだ。もうここにしようと思ひに場所がどこかにあるはずと。

2時間過ぎ、あたりは真つ暗になった。安っぽいセリフに騙された自分が情けない。だが、夫への愛も再認識した。本当に馬鹿だった。これほどの闇を見たのは初めてだ。いつもは電気の中で生活しているのだから、冷蔵庫を開けても、ケータイを開いても明るくなる。電源ももう入らない。凍えるように冷えてきた。これで死ぬ。ここで死ぬ。浮かぶのは夫の働く後ろ姿。何がカッコいいのか今ならわかる。意識が遠のいていく。

「今日子ーっ。おい。」

と、なんだか夫の声がする。気のせいね。やがて、

「おい、起きろ、今日子。」

と、揺さぶる夫がいた。

「大丈夫だ、今日子。」

「あなた。」

ここはふもとの病院。私の軽四のナンバーが手掛かりだったのね。

「馬鹿野郎。お前がいなくて俺がどうやって生きていくんだ。二人で一生一緒について誓ったのを忘れたのか。」

「ごめんなさい。でも、私、あなたを騙して……。」「言うな。」

と言いながら、夫は目に涙をためて黙って手を握ってくれた。

あれから3年。

今日も漬物をつける私。夫は配達に出かけて行った。姑は

「今日子さん、ここに置いてあつた秀雄の哺乳瓶は？」

「全部飲んだから洗いましたよ。」

「あらそう。じゃ、おむつ替えましようね、秀ちゃん。」

鴨居には一枚の写真が飾られている。月山。この子が小学生になったら連れて行こうと、夫婦で話している。でも、その時は4人になつてるかも。また、生理が遅れている。あれほど望んでいるときはできなくて、ふつきれたら年子でできるなんて。今日子は元氣よく大根を漬け込んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4262i/>

月山

2010年10月26日04時39分発行